

教員おすすめ図書コーナー推薦書

教員氏名	おすすめメッセージ
佐藤 和宏 先生	
① 図書名：「叱る依存」がとまらない 著者：村中直人 出版社：紀伊國屋書店	ここ1年くらいだろうか、ハラスマントという言葉に胸がザワザワしている。「した」と過去形にして忘れないように、昨年は雑誌『世界』の森喜朗（元）首相に関するコラムを薦め、今年は、たまたま知ったこの本を読むことにした。 叱るという行為は、一見して「叱られる人のため」「いま叱っておかないと後で困るから」と叱らわれる側の視点に立っているようでいて、その実、叱る側の依存である、ということを主張した本。授業期間、（もとより私の授業はおもしろくも上手くもないのだが）自信を失っていた時期に読んだこともあり、たいへん身になった。依存症とは、①コントロールできないから「病気」なのであり、②言い換えると人格と症状は別であり、③「病気」だから治せることを強調した、『世界一やさしい依存症入門』（2022年推薦）も参照のこと。
② 図書名：自分ひとりの部屋 著者：ヴァージニア・ウルフ著・片山亜紀訳 出版社：平凡社	授業をして一番学びになっているのは、誰であろう、教員だと思う。カードリーダー恐怖症（古き良きと言えるか分からぬが、「昔、高経にはピ逃げという言葉があってじゃな…」）である私は、平常点として、コメントペーパーを毎回出してもらい、できるかぎり読み、それにリプライするようしている。 数年前だったか、住宅政策論の授業でハウジングファーストのことを扱った際（稻葉ほか編『ハウジングファースト』は良い本）、「授業を聞いていて、ヴァージニア・ウルフを思い出した」というコメント。いつか読もうと。 約100年前、第一波フェミニズムは女性参政権を獲得した。100年経ち#MeTooが新しい潮流に。「女性が小説を書こうと思うなら、お金と自分ひとりの部屋を持たねばならない」、この言葉の実現のため、私は懸命に生きる。
③ 図書名：世界の片隅で日本国憲法をたぐりよせる 著者：大門正克 出版社：岩波書店	ゼミの研究室訪問で嬉しい出会いがあった——私の言葉は届いていたのだ！ 昨年、障害を持つ人について書くことになり、戦後憲法・教育基本法がありながら、障害児への義務教育は遅れをとったと知る。映画『まなぶ』をぜひ見て欲しいが（涙がずっと止まらなかった）、貧しさゆえに学ぶことが叶わなかつた人もいた。学ぶことのできる私たちは、懸命に学ばなければならない。 1章を読み、『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成』、映画『スープとイデオロギー』を想起した。憲法を知らない人間が憲法を変えようとする中（境家史郎「『非』立憲的な日本人」『中央公論』）、本書は、生活と歴史に立脚しつつ、私たちの憲法観——憲法を守らせ、憲法観を更新すること——こそ、生きていく指針であり理想であることを示している。